岐阜県中学校
国語教育研究会

会報No.２

新鮮な企画と強力な実践を
――中・国・研 共通の労作のために …… 野田　満 （1）
教材に思う …… 小牧　愿 （2）
文学作品の集団読み …… 原田昭二 （5）

会員名簿 …… （7）
あとがき …… (11)

１９６２,６,２０

新鮮ななな企画と強力な実践を
‖中・国・研共通の労作のために

精華中学校長　野田　満

先日、県中学校国語教育研究会の理事会があった時年間の仲間の事業として何かをみつけたいというので話し合いがあった。

その時は、

漢字の学習書

文学的教材等の副読本（補充教材）

「ことばのきまり」の手びき書

国語の学習ノート

ワークブック

等の編さんについて、かなり活発に意見がかわされた。

それぞれについて、手わけをして研究し、一應の目算をたててもらうことになっている。

何とかしていいものをこしらえて、県下の中学校国語教育の向上に資したいという気持は共通であるが、さしづめ何が必要かということになると十人十色になるおそれもある。

ワークブック、学習ノートなどは、市販のものが氾濫しているのであるが、それはそれだけに、われわれ自身の手によって、いわゆるドリル学習を正道にもどさねばならぬとも言える。

「ことばのきまり」の手びき書については、未開拓の分野だけにフアイトもわく。仲間に優れた実践家もいるので手がけやすいかも知れない。

文学的教材の補充ということも、本質的に意義のあることだし、これまた優れた実践家が多いので、個性味豊かなものをつくりあげることもさして難事ではない。ただ、短時間には実現しにくいという予想も立つ。

漢字の学習書、これも市販のものが多いが、概して常識的なものが多く、形式的なドリル主義に堕してゆたかさがない。

生徒が漢字に奉仕するといった気配がこい。

そういうものでなく、そっ直に、ゆたかに、より的確に自己を表現するために、あるいは、ひとの文章をより正確に、よりち密に理解するために、生徒たちはいかに漢字を駆使すべきか、そういうことに直接に役立つ学習書もぜひ必要である。

理論的に、方法的に、異なった見解の人々も共通の問題として、まずこの門だけは必ず生徒に通らせなければならないといった普遍性もある。

大ぜいで、衆知をあつめて、よりよいものを編さんし得る可能性も多い。

今、中学校の生徒たちに、国語科として与えなければならぬことがらは、数多くある。

そのうちのどれでもよいから、まずひとつ、県下中学校国語教師の共通の労作として、具体的に実現したいものである。

どれでもよいからというのは、現実の条件を考えてまず手がけやすいものから完成し、成功して、次の仕事の基礎を作りたいという真意である。

新鮮な企画と強力な実践を中国研にお寄せくださるよう念じている。

教材に思う

岐阜市岐陽中学校　小牧　愿

◎　教材の重要性

教材によりかかって、ことばの教育をする特性をもち、ことばだけを切り離して、その意味やはたらきを理解させることのできない国語科にとっては、特に、教材のすばらしさということが重要になってくる。

国語教材である以上、語い・文法・文字・文章構造などがたいせつな要素であること、計画性のないものではならないことなどは当然のことである。

が、そういうものが備わっていれば、どんな内容の文章であってもよいというわけにはいかない。その内容がそらぞらしい、迫力のないものであってよいはずはない。それは、こどもたちをひきつけ、感動させ思考させるに充分なねうちあるなかみをもったものでなければならない。

こんなことは、今さら、私などが言わなくても、わかりきったことである。しかし、そのわかりきったことを、言わないではいられない気持ちにさせられるときがある。それは、つぎのような、全く魅力のない、教科書教材に当面したときである。

登　校

村野四郎

新しいノートと新しい本、
ぎっしりつめた　かばんの重みが、
わたしの歩みを力づよくする。
けさは、目にうつるすべてのものが、
自信にみち、
生気にあふれ立っている。

胸をはって行く朝の道、
ふと、心のどこかで、
もう一度、
やさしい母のことばがささやく、

「しっかり　やってね。」と。
母の心は、このことばに生きて、
わたしの心によびかける。
すると、わたしの胸の底で、
はっきりと、これにこたえる声がある。

明るい光、
ひろがる風景、
道をはさんで、
いちめんにゆれる黄色い菜畑、
風が
花のにおいをはこんでくる。

これは、一年の最初の単元「ことばと心」（光村図書）の中の第一にのせられている文（詩と言わず、あえて文といいたい。）である。

これのねらいは、単元名でも明らかであり、最初のところにも書かれているように、「新しい生活の中でことばというものが、どんなにたいせつな役わりをたしているものか、あらためて考えさせ、ことばと心のつながりについて、自覚を持つことができるようにする。」にある。

このようなことをねらう単元の第一に、人間の感動をより直さいに、より簡潔に凝集した詩を持ってくるという意図はたいへんによいと思う。

ところが、ここにのせられた、この詩（？）はどうであろうか。まったくそらぞらしい、感動の欠けたことばの集まりではないか。これで、ことばの重要性とか、心のつながりとかを感得せよとは、どだい無理な注文である。お説教ならば、はっきりと「ことばは大切です。心のあらわれです。」といったらどうであろうか。

今の場合は、その文章なり詩なりを読む中で、味わう中で、体得し、自覚をもたせるようにしたいといのねがいがあってのはずである。であったら、すばらしい魂のあらわれの詩や、人間性豊かな随筆を読ませ、あるいは、あたたかい心の通い合う会話の文や、手紙を読ませればよいではないか。

◎　私たちの態度

このために、私たちは教材を充分に研究し不適当なものは捨て、必要なものは補って、形式・内容ともに充実したものを使うように努力することが大切である。

とは言っても、今ただちに、全面的に、十分なる研究や準備もできず、不本意ながらもこうした教材を使う場合も出てくるのが実情である。

で、もし、これを使って学習を進めるとすればどうするか。授業の大まかな流れだけを記して御批判をこいたいと思う。

◎　「登校」を使って

作者にはまことにすまぬことではあるが、私は、この詩（？）をよくない例として取扱ってみた。

すなわち、

1「これを読んで何を感じたか。」に対する生徒の答その中の、

・自信があるように書いているが、ぼくは不安だった。

・この文は、よい詩にするため、自分では思わないことまでうそをついて書いてあるように思われる

・この詩人は、うそを書いていると思われる。なぜかというと、おとなは中学生の気持ちにはまずなれないから。だけど、おとなが中学生の気持になって書いたのはいいと思う。

など、詩の気持ちと相反する発想、批判的な意見を取り上げ、みんなの問題にしてみる。

2すると、今まで「うまくかけていると思う。」とか「感じたことがよく書けていると思う。」などと言っていた生徒の大部分も、「そう言われれば、そう思う。」とこの意見に賛意を示すなかまがたくさんでてくる。

3そこで、「どこにうそらしいところがあるか。うそらしいのはなぜか。」と、

全体から、部分的に

作者、おとな、ことば　〉などにふれて

4「とにかく、作者はどういうことを書こうとしたのかはわからないか。」「それはどこに……

ことば、気持……文章に即して

5では、みんなのほんとうに気持ちを、うそのないことばで書いてみよう。

・入学式のときや、最近感じたこと。――目のつけどころ……具体的に

・詩であるもの、詩でないもの……例示（省略）

と、自分たちの気持ちを表現するところまで進めてみた。しかし、第一回の作品には、半数ぐらい、教科書のやきなおしのものがあらわれた。が、中に、目のつけどころのわかった者、表現も比較的、自分のものとなっている作品もでてきた。（作品掲載者略）

6そこで、それをみなで読み合い、もう一度書き直しをした。

と教科書教材から出発し、表現するところへ持って行く間に、前に述べたようなねらいの達成ができないかと思ったわけである。

なお、例示をするときに、何をもってくるか。それがやはり教材の重要性に連なる問題だと思う。

文学作品の集団読み

海津郡海津町立日新中学校
原田昭二

一、文学教育のねらい

◎生きることの味わい

○多種多様な人生を実感として味わうこと。

単純に生活指針を決めたり
すぐ現実と対比して批判することの　危険さ

◎客観的に読むこと。

○典型として読み、人物心象として把握すること。

○現実の中に、自己の経験の中に類型を発見すること。

人間認識の拡大

自己の生きることの中での位置づけ

二、集団読みの必要

◎実感をとおしてたしかめあうこと。

○子どものもつ積極性・正義感・楽天性・行動性

作品を考えさせ、作品に反映させ、作品観を交流させ、作品の評価をさせていく。

現実の（・人間認識・生活認識）を正しく確かなものとしていく。（認識の質をかえ高めていくこと。）

◎認識の拡大となかま意識を育てること。

○子どもの集団――多種多様な経験の集まり。

作品をとおしての経験の交流

生きた人間認識の拡大（実感として）……個人の深化・拡充

集団の構成員としての意識と理解……なかまづくり

三、ひとつの実践（三年生）

――「山椒大夫」のテーマ把握を中心として――

（教科書には、安寿と厨子王が山椒大夫のもとへ売られた翌年、初めて二人で山に出るところから終りまで

がおさめられている。）

◎中心になる人物は安寿と厨子王だが、どちらに重点がおかれているか。

◎それはなぜか。

厨子王……・最後まで生き残っているから。

・安寿は途中で死んでしまったが、厨子王は舟を助けたから

安　寿……・文章の後半、厨子王は安寿の意志どおりに動いたにすぎないから。

・文章のもっとも感銘深いのは山の中の別れのところで、その中心は安寿だから。

ここで必らず表現と結びつけて考えさせなければならない――

特に会話のうまさ、傑出した描写の味わい。

◎安寿をとおして何を描こうとしているか。

安寿の犠牲的精神の美しさ（安寿の死を美化した表現をとおしても）

テーマに近づく

ここで生徒の目を現実に戻す必要がある――

◎不自然に思われるところ、なっとくのいかないところはないか。

・四つの奇蹟（守り本尊）。①夢　②曇猛律師　③関白師実の娘　④母の開眼

・安寿の信念。

・正道（厨子王）の山椒大夫に対する扱い。

問題を残してテーマへ

◎「山椒大夫」の題名は何を意味しているか。（象徴性）

◎テーマの発見

○　運命の重圧のもとに輝いた安寿の犠牲的精神の美しさ

ここで終ってはならない

ふたたび生徒の目を現実に――

◎これはすばらしいことと思うか

この部分はページの折り目に隠れて判読不能

×××××××××××、こういう二人は、こういう生き方をした味わい

典型

集団によって作品に迫り、

あいをする

○ 四つの奇蹟と正道（厨子王）の山椒大夫一家に対する扱い方について

・奇蹟について――こんなにうまくいくものだろうか。
――生徒の生活経験から

・山椒大夫一家の扱い方――こんなことではやっつけたらん
（特に読みの深い生徒に多い）
――生徒の生活感情

◎ なぜこういう奇蹟がこの作品では必要なのか。

◎ なぜ山椒大夫一家の扱いをこうせねばならないのか。

――作品批判へ――

（安寿の生き方の美しさはよくわかるが、その美しさの意味を十分考えなければならない）

← 集団によってたしかめ

会員名簿

（昭和三十七年六月現在）

岐阜市――

伊奈葉	松田　充
	玉井武博
	村井スミ子
	所　稔
	赤堀和之
	近藤　護
	浅野道雄
	後藤　昇
明郷	高井宗夫
	河野博雲
	市橋国雄
	松久敏郎
	村瀬美代子
本荘	田中秀夫
	川田　肇
	水谷紀夫
	吉田辰美
	児玉博次
	千種　俊
梅林	野田了爯
	堀　清子
	小沢雅弘
	浅野和夫
	青木富彦
加納	片山利彦
	舟坂民平
	大野正行
	古田左右吉
	宇野慶子
	西山卓夫
	山本春子
	宮部芳郎
	山本喜久男
長森	伊藤昭三
	小川淳心
	橋本雅芳
	後藤一次
	中村慶三
	片桐哲郎
長良	後藤道子
	吉田雄平
	田口参吾
	奥村幸夫
	可児省吾
	高井　健
	高木義明
島	南木道隆
	三浦　旭
岩野田	高木浩美
精華	野田　満
	高橋俊太

村木 英雄
小牧 愿
苅谷 忠芳
林 和美
高橋 善昭
榊原 隆清
中島 良太
伊藤 真治
大塚 聰英
河村 熙子
小島 敏
古宮 喜郎
横幕 信夫
馬渕 文雄
棚橋 嘉明
岩田 雅行
扇本 肇
赤座 憲久
不破 成美
土井 光郎
河合 治人
岸 武雄
早野 信道
松原 隆
高橋 和子
堀部 昭

栗井 智城
児玉 実
後藤 和
岩田 豊夫
稲川 満秋
上島 八重子
片山 茂子
旧井 昭夫
水野 建
渡辺 美代子
若宮 花子
三島 登
若松 房子
五島 文雄
杉原 旺
稲川 至誠
古田 晃
村田 豊彦
吉田 祐子
川並 吉
後藤 慶一郎
浅野 昭夫
桐谷 忠夫
浅野 吉久
岩下 ひさ
水木 千昭
下田 芳雄
松倉

塚腰 静清
瀬木 敬一
牛丸 政子
宮田 栄一
木下 亮
山下 清雄
高嶋 一雄
小谷 一雄
下田 修
畑中 裕作
若尾 武
梶田 勝義
今井 順子
篠原 厚義
今井 京二
尾関 行雄
浅井 秀泰
山内 礼子
坂井 登
岡庭 芳彦
緑ヶ丘 忠雄
鷲見 恵一郎
各務 利達
上野 恵
田原 重寿
小金田 安池

石井 宗文
後藤 俊道
尾関 忠男
渡辺 さつき
牛牧 上
中島 清秋
大沢 昭男
広瀬 正義
栗本 徳一
丹羽 勝
小瀬 美
近藤 虎之助
石原 文夫
川口 淳
石原 伸吾
丹羽 東平
木 苗
赤塚 恒美
牛本 孝一
井戸 久之

瑞浪市
釜戸
小池
猛

土岐市
西陵
木原
功

稲葉郡
那加
浅野
秀男
石田
幸彦
杜田
敏子
宇野
彩子
水野
令子
大野小次郎
北川
一郎
森
智誠
西脇
俊雄
松波
愛子
三宅
正彦
鵜沼
森
政美
蘇原
黒田
有承

羽島郡
川島
馬渕
秀雄
羽栗
大竹
文江
本多
秀文
笠松
岡部
英雄
山内
志げ
堀江
静世

海津郡
新日
関谷
光茂
原田
昭二
丹羽
光夫
今尾
田中
貞恵
比叡
暾
貝沼
静春
古橋
純子
佐々木
博
高橋
弘
岡田
修
城山
松永
信円

養老郡
高田
功
田中
豊
三輪
良
夛

不破郡
国枝
法雄
山本
一彦
高瀬
八重子
不破

蘇西
森島
登志子
樋口
シゲ代
恒川
正美
坪内
広清
武藤
道保
石原
筆男

揖斐郡
揖斐川
河野
通清
牧村
薫
細野
よし子
長瀬
岸
秀夫
北和
細野
敬
揖東
浅野
真康
池田
東雲
文祥
樋口
信子
堀口
千鶴子
牧村
勇夫
国枝
一枝
松岡
勝治
大野
浅野
真康
清水
佳夫

山県郡
杉原
明雄
教委
富平
林光
高

関ヶ原
古橋
龍夫
西松
ちよ子
山田
亮寛
赤坂
広瀬
文縁
野村
彰因
中村
良治
岩手
堀
昭

郡上郡
奥明方
金子
貞二
八幡
簑島
文男
北山
夛田
定信
富波
森下
文男
谷合
足立
敏郎

南中原
末田
幸子
原
義昭
実

郡南
足立
宣幹

加茂郡
坂祝
河合
祐輔
富加
河合
正十
村瀬
穂積
松葉
武司
中部
木村
康男
高田
武
中山
健彦
上麻生
後藤
囮祺
林
大三
小池
希一
久田見
日江井
正己
渡辺
寿雄
西尾
五三男
福地
佐合
智恵子
林
奨仁

黒川　中島　享
大山　北沢　一
坂ノ東　服部　歌子
神渕　北村　龍浄
教委　堀部万寿夫
佐見　和田　隆三

可児郡

共和　伊藤　照男
向陽　秋山　益巳

恵那郡

上中　山田　義雄

益田郡

東中　今井　竹治
濃斐　桂川　好勝
森　敏子
今井証次郎
下呂　田口　敬
二村　益栄
和田　守二
上原　二村　恒晴
今井　政美
竹原　荒井　信夫
曽我　英子
南中　野崎　鉄郎

北中　三宅　征子
田口　定一
細江　正明
森元いほ子
中切　中島　健夫
中原　細江　広久
山之口　篠原　重和

吉城郡

元田　藤守　一心
坂下　奥洞　泰造
室屋　昭彦
岡部　勲
山田　谷口　健三
石坂　昭義
神岡　甲谷　良治
栗山　敏
西田　郁雄
古田　昭教
岩垣　忠一
宮川　高井　正助

安八郡

神戸　渡辺　敏行
臼冨　文成
田宮八重子
日比　邦子
森　英誠

立ママ　立川　澄夫
輪之内　牧野　典彦
登龍　高橋　次郎
東安　浅野智恵麿
渡辺　満

大野郡

朝中　桂川　鈴郎

‖会費未納の先生に‖

なにとぞ、至急納入くださいますようお願いいたします。

納入先
岐阜市藍川中
高橋善昭あて

あとがき

○うっとうしい梅雨どきを迎え、気分まですっかりじめじめしています。が、会員のみなさん方には、お元気でなによりです。

○会報第二号を五月ごろ発行するつもりでしたが、とうとう六月になってしまいました。“「会報を出すぞ」という掛け声ばかりで、ちっとも出ないじゃないか。”と、郡部の先生方からきついお叱りを受けていましたが、やっとのことで、出来上がったような次第、これも事務局のいたらなさで、申し訳ありません。

○出来上がったものは、また、まことに貧しいもの。これも事務局の責任と、会員のみなさん方に、おわびしたい気持でいっぱいです。

○でも、県下から“どうした”という声が掛かってくるようになったことは、おっかなびっくりで、機関誌？発行に踏み切った事務局として、ほんとうにうれしく思っています。

○今はこんなに細々としたものだが、だんだん声も大きくなって、機関誌はもちろん、この中・国・研もほんとうに実のある会に育っていくに違いない。

こんな気持ですし、また、信じてもいます。

○みなさんの寄稿をお待ちしています。

（事務局　千　種）

昭和三十七年六月二十日

岐阜県中学校国語教育研究会

（岐阜市本荘中学校内
電話２―３４５０）